HANDBALL ハンドボールリボーン Reborn! ②

68年メキシコ五輪銅メダルの栄光は完全に消え去り、アジア予選敗退を繰り返すたびにスタンドには閑古鳥しかいなくなった。そんな日本サッカーの将来を憂い、プロ化の先鞭をつけてJリーグ発足に尽力した木之本興三（02年日韓W杯日本代表チーム団長）が、元ハンドボール日本代表主将の東俊介（大崎電気）と再生プランについて熱く語り合った。

▽木之本興三（きのもと・こうぞう）＝写真右 49年1月8日生まれ。千葉県出身。千葉高から東京教育大（現筑波大）。Jリーグ専務理事、サッカー協会常務理事など歴任。現在は㈱エス・シー・エス代表。NPO法人アブレイズ千葉サッカークラブ理事長。
▽東俊介（あずま・しゅんすけ）＝写真左 75年9月16日生まれ。石川県出身。国際武道大、早稲田大大学院卒。大崎電気で日本リーグなど9度の日本一。現在は日本ハンドボールリーグ機構マーケティング部の部長を兼務。（写真は©六川則夫）

東「男子ハンドボールは88年ソウル五輪を最後に世界の桧舞台に立てなくなり、国内リーグの人気も低迷。サッカーを劇的に変革した木之本さんの目にハンドボール界はどう映っていますか？」

木之本「6年後の東京五輪には予選免除で出場できる。そこで好成績を残すために代表を強化すべし！ ではダメです。五輪の後も、日本のハンドボールが強豪であるためには、東京五輪を契機にプロ化に踏み切ると覚悟を決め、今の段階からグランドデザインを描いていく必要がある。正直に言ってハンドボールの認知度、将来性ともに低いと言わざるを得ない。まずはハンドボール関係者に『プロ化に将来を託す覚悟はおありですか？』と問いたいと思います」

東「ハンドボール協会内でも、プロ化に向けて邁進しないと未来はないという共通認識はあるのですが、足並みが揃っているとは言い難い部分もあります。ボク自身は、ハンドボールを変えていくには『よそ者・若者・バカ者』のパワーが必要と思います。よそ者として木之本さんたち他スポーツに関わってきた人から知恵を拝借し、若いハンドボール選手はレベルアップを果たして面白い試合を提供。ボクたちOBがバカ者になり、ハンドボール再生のためになりふり構わずに働く。その覚悟は出来ています」

「まずはハンドボール関係者に『プロ化に将来を託す覚悟はおありですか？』と問いたいと思います」（木之本）

木之本「かつて日本リーグ事務局には、2人の専従職員しかいなかった。日本リーグを自主運営するようになり、事務局をサッカー協会から独立させることでプロ化の機運も高まった。しかし、アマチュアリズム全盛の時代にプロという言葉自体にアレルギーがあり、口にするだけで『ついに血迷ったか？』とボロクソに言われた。まずは選手のプロ契約制度を皮切りに環境整備を一歩ずつ進めたものです。その点、ハンドボールには契約選手が既に存在している。当時のサッカー界と比べるとプロ化への素地が整っている印象があります」

東「ハンドボールの知名度がアップするチャンスが3回ありました。97年に欧州以外で初となる世界選手権が熊本で開催された。06年、テレビ番組『スポーツマンNo.1決定戦』で宮崎大輔選手が好評を博し、08年北京五輪予選での《中東の笛》でハンドボールへの関心が高まりましたが、アピールのチャンスをフイにしてしまった。前轍を踏まず！ 20年の東京五輪開催は、最後のビッグチャンスです。ハンドボール関係者全員が、熱い思いで取り組まないといけないと思っています」

木之本「何よりもハンドボール協会のリーダーシップに期待しています。まずはプロ化へのたたき台を作り、きちんと文書化して具体的なイメージを共有することが大事。Jリーグ発足のノウハウを出し惜しみせず、ハンドボール発展のために全力を尽くしたいと思います」

（次回3回目は9日発売号＝10日付号に掲載）